最後のキス
～琉球の海を渡る風～
東　めぐみ

Ｍｙｓｔｅｒｉｏｕｓ　ｍｏｒｍｅｎｔ～不思議な力に誘(いざな)われて～

Ｍｙｓｔｅｒｉｏｕｓ　ｍｏｒｍｅｎｔ～不思議な力に誘(いざな)われて～
　そっと一つ、溜息を落として、藍那(あいな)は手にした本を元に戻す。彼女の視線の先には藍那の背丈よりも高い書架があり、そこには数え切れないほどの膨大な数の蔵書が整然と並んでいる。
「琉球の歴史って言っても、一体、どの時代から手を付けて良いのかも判んない」
　藍那はまた溜息をつき、たまたま眼に付いた上から二番目の棚に手を伸ばした。　ええい、あと少しで手が届くのに。小柄な藍那では、高い場所専用の梯子を使わないと取れそうにもない。一瞬、諦めようかと思ったが、何故か、その本が自分を呼んでいるような気がした。
　馬鹿みたい。本が自分を呼んでいるなんて。そんな幼稚なことを考えるから、高校二年にもなって、いまだに彼氏の一人もできないのだ。親友の有希枝は今日も高遠(たかとう)君とデートだという。
　いちいち報告してくれなくても良いのに、有希枝はデートの度にあれこれと話してくる。今日は手を繋いだだとか、コーラを同じ缶で回し呑みしたとか。昨日の夜などは深夜に携帯電話のメール着信音がしたかと思うと、
ーやった、ついにファーストキス。　なんて、実にくだらないメールが送られてきた。
　こっちは深夜の十二時を回って、熟睡していたというのに、迷惑以外の何ものでもない。
　それに、有希枝は藍那が高遠君を好きだということを知っているはずなのだ。なのに、何故、彼とのデートの逐一をこうして伝えてくるのか、その神経が知れない。有希枝とは小学校五年来の親友だと思ってきたけれど、それは所詮、都合の良いときだけ馴れ合ってきた関係に過ぎないのかなとも思う。
　高遠遥人(はると)。ちょっと何とかいう韓流スターに似たイケメンだ。高校になって先に同じクラスになったのは藍那の方だった。とにかく目立つ男の子で、陸上部では長距離のエース、県大会優勝、国体入賞という輝かしい経歴を持っている。

　その上、成績も常にトップクラス。これでイケメンとくれば、女子にモテないはずがない。藍那は遥人に熱い視線を向けるその他大勢の女子の一人だった。対する有希枝はよくぞこれほど真逆な二人が長年、親友をやってこられたかと思うほど、美人である。
　つまり、藍那は極めて地味で目立たない女の子なのである。まあ、自分で言うのも何だが、ブスというほどまではいかないだろう。それでも、有希枝の隣に並べば、自分は彼女の単なる引き立て役なのだとは十分理解しているつもりだ。
　もっとも、この〝自分は冴えない女〟の思い込みは藍那本人が勝手に作り上げたイメージにすぎない。現実には茶髪で少しクセのあるウエーブヘアを二つ結びにし、色白で時に榛色にも見える瞳を持つ彼女は ―あの子、フワフワして可愛い。ハーフのモデルみたいな二年の女子生徒。
　と、結構、男子たちの間では噂になっていることは知らない。　要するに黒髪ストレートロングで背も高い有希枝はスレンダーな日本人形タイプで、二人が対照的だというだけの話である。
　ところが、見かけは見劣りはしなくても、性格はまるで違った。　当然、二人でいても、いつも主役は有希枝の方だった。性格までが容貌と同じ（←これも思い込み）で、有希枝は活発で誰とでもすぐに打ち解けるが、藍那は極度の内気だ。知らない人たちの集まりに身を置いただけで、身体が竦み、何も言えなくなってしまう。　男の子がどちらのタイプを選ぶかは一目瞭然である。もちろん、藍那は親友である有希枝には遥人への淡い想いを打ち明けていた。学校中の女子生徒の注目を集めるモテ男と冴えない地味女。誰が見ても、この先に見込みはない片恋だと言うだろう。また、そんな高嶺の花を望む藍那を馬鹿だと嗤うはずだ。
　しかし、有希枝だけは嗤ったりしないで、話を聞いてくれる。心からの信頼があったからこそ、藍那はすべてを打ち明けた。なのに。 ―高遠君がねぇ、あたしに告ってきたんだ。
　と、思いもかけないメールが届いたのは今から一ヶ月前になる。長い夏休みに入る直前の暑い午後のこと。　有希枝の話が真実ならば、別段、彼女に非があるわけではない。藍那の遙人への想いは極めて一方的なものだったし、告白したこともなかったのだ。遙人が有希枝に告白したというのなら、かねてから彼女に恋心を抱いていたのだろう。

　そこに、藍那が割り込める隙はない。けれど、藍那にしてみれば、有希枝の行動には解せない部分が多すぎる。　まず、親友が自分の新しい彼氏を以前から好きだと知りながら、その気持ちに触れもせずに、いきなり付き合い始めた報告をしたこと。
　結果として遙人が選んだのは有希枝だった。だから、謝って貰うことはないのだが、こんなときはやはり、
一藍那の気持ちは前に聞いて知ってたけどね。
　とか、適当な前置きが欲しかった。
　いや、百歩譲って親友の好きな男の子を奪うようなことになったのだから、有希枝が言おうにも言えないとしよう。それはまだ理解できる。
　しかし、夏休みに入り、三日に一度はデートをしているらしいそのすべてを逐一、恥ずかしげもなくメールで報告してくるのは、あまりにも無神経ではないか？　藍那の切ない恋心を知っている有希枝だからこそ、敢えて遙人への藍那の気持ちに触れないのだとしたら、デートの様子や一ましてやキスを交わしただなんて伝えてくる必要はさらさらない。　その関係で、藍那には折角の夏休みも鬱々とした、つまらないものになりつつある。唯一の愉しかった想い出は母と沖縄を訪れたことだ。母が沖縄県出身なので、藍那は幼い頃は夏になると、母に連れられ、沖縄に里帰りしていた。
　その頃はまだ祖母が健在で、藍那は長い夏休みを海辺の見える縁側で過ごしたり、宿題をしたりしていた。だが、その祖母も藍那が小学校三年のときに亡くなり、小さな海辺の家は無人になった。毎年のように沖縄に里帰りしていた母もそれからは滅多に帰ることはなくなり、たまに思い出したように墓参りに行くだけだ。
　今年は二年ぶりに祖母の墓参りのため、沖縄を訪れた。藍那は母と二人暮らしだ。両親は藍那が二歳のときに離婚したから、実は藍那には父親の記憶はまったくない。父とは一年に一度、逢えば良い方だ。
　父も数年前に再婚し、今では新しい家族がいる。藍那には母違いの幼い弟妹がいる。もっとも、顔を見たこともないので、現実感は薄
いが。

母は化粧品のセールスレディをしながら女手一つで藍那を育ててくれた。藍那にとっては、遠い昔、母とまだ二歳だった自分を棄てた薄情な父は家族ではなかった。家族と呼べるのは亡くなった沖縄の祖母と母だけだ。

今年は二年ぶりに沖縄に帰るというので、藍那は休みに入る前から愉しみにしていた。その待ちに待った三日間の滞在期間も瞬く間に過ぎ去り、藍那はまたこの街に戻ってきた。北の地方都市にすぎず、都会でもなく田舎ともいえない、極めて中途半端なこの故郷に。

藍那はこの街で生まれ育った。父と母が出逢い結ばれ、自分が生まれた街なのに、何故か、好きになれない。それは多分、父が自分たちを棄てて出ていったのも、同じこの街だったからだ。

今、父や新しい家族がこの街ではなく大阪の方に遠く離れて暮らしていることがせめてもの救いに思えた。母は口には出さないけれど、二十三歳でシングルマザーになり、ずっと懸命に働きながら藍那を育ててくれた。ここに至るまでには苦労も新しい恋もあったろう。

それでも、藍那のことを考えてか、母は再婚はしなかった。二、三年前には何度か男の人の声で電話がかかってきたこともある。穏やかな雰囲気の感じは悪くない人だった。母の応対ぶりから、かなり親密な雰囲気が伝わってきて一、そのときにも藍那は

一私のことは気にしないで、お母さんは自分の幸せを考えてよ。

と言ったものだ。

沖縄の高校を卒業し、この街に出てきて就職した母は二十一で藍那を産んだ。だから、まだ三十八歳の若さである。

藍那にしてみれば、これまで苦労を掛けた分、母にはこれからは自分の一女としての幸せを得て欲しいと願っている。　藍那はこの街がどうしても自分のふるさとだとは思えない。父と母が出会い、父が自分たちを棄てて去っていった街。多分、認めたくないという気持ちが強いのかもしれない。

裏腹に、何故か、たまにしか行かない沖縄の方にはるかに強い執着を感じてしまう。どこまでも蒼い海と白い砂浜を見ていると、この土地こそが我がふるさとという気がしてくる。今年の夏も三日間だけしかいられなかったけれど、もう帰りたくないとすら思った。

藍那は高校を卒業したら、就職を考えていた。が、母は強く大学進学を希望している。

一私が行かなかったから、藍那だけは大学行かせたいのよ。

母はそう言って笑う。

どうせ行くなら、沖縄の大学が良いかななどと、最近は考え始めている藍那だ。
しかし、そうなると、母一人をこの街に残していくことになる。とはいえ、考えようによっては、一人になることで、改めて母も自分のこれからについて考える良い機会になるのではないかとも思うのだった。いつまでも良い歳をした娘がべったりと側にいては、母も恋人の一人も作れないだろう。
年老いた母親ならばともかく、まだ三十代の母が一人暮らしになったからといって、何が起こるとも思えない。　本気で沖縄の大学進学を考えているのならば、そろそろ大学案内なども取り寄せてみなければならない。が、その前に何と言っても、片付けなければならないのが高校の宿題だ。
どの科目も山のように出ているが、とにかく頭を悩ませているのが歴史だった。
ーあなたが知っている土地、場所について。その地方の歴史や歴史にまつわる事柄をレポート二、三枚にまとめて提出すること。
場所は特に限定しないとのことで、実際に訪れた場所でも良いし、行ったことはなくても興味のある土地でもＯＫだという。　大嫌いなこの街についての歴史なんて調べる気にもならない。他に知っているといえば、沖縄の祖母の住んでいた土地くらいのものだ。ならば、大好きな沖縄について調べようと簡単に決まった。
今日はレポートを書くための文献資料を図書館に借りに来たのである。本当は有希枝と一緒に来るはずだったのだけれど、直前の今朝になって
ーごめん、遙人君が隣のＮ高と合同練習やるんだって。記録会みたいなのも兼ねてるらしいから、応援行ってくる。そういうわけで、今日は一人で行って。
何とも腹立たしいメールが届いた。
まあ、最近、有希枝とは何かとすれ違いばかりが続いているから、今更という気がしないでもない。
というわけで、一人で街の外れにある図書館にやって来た。この図書館は県内でも最も古い建物として知られている。昭和初期に建てられたものを何度も増改築を繰り返しながら、いまだに使用しているのである。外観は石造りのレトロな二階建てで、蔦の葉が絡まっていて、藍那はこのノスタルジックな雰囲気が結構気に入っている。

近くにある近代的な図書館に行く方がはるかに効率的なのに、時間をかけて自転車漕いで、こっちの方に来ることが多いのは、そのためだ。一階には小さな喫茶店もあり、そこで休憩する人も多い。

沖縄の歴史といっても、いざ調べるとなると、どこから手を付けて良いのか判らない。まずはテーマを決めなければならないと思うのだが、そのテーマが漠然としていて、何を調べれば良いのか途方に暮れてしまう。

それで、沖縄関係の資料があるコーナーを受付で教えて貰って調べているのだ。しかし、二階の最奥の一角を占めるこれだけの蔵書すべてが沖縄の地理・観光・歴史、すべてに関連しているというのだから、ますます気後れすることになった。とりあえず眼に付いたものを適当に選んで内容を見てみても、どれも今いち興味を惹くものではない。　今、気になっているのは上から二番目の棚にある。面倒臭いが、何故か、あの本が気になって仕方ない。藍那は近くにあった高架用梯子を運んできて、その上に立った。漸く手が届き、本を手にすることができた。

「なになに、琉球王国の落日」

何だか小説みたいなタイトルだなと思いながら、パラパラとページをめくる。

どう見ても、最近、誰かが借りたような形跡はない。数百ページはあろうかという分厚い本は古めかしい装丁で、表は深いグリーン地に唐草模様が金で入っている。他に模様らしいものは一切なく、タイトルがやはり同じように金で〝琉球王国の落日〟と記されていた。　本に積もった薄い埃を軽く手で払ってから、古い書物を傷めないように慎重にめくる。　まず眼に付いたのは、複雑な家系図のようなもの。ページ冒頭に〝琉球国王尚氏系図〟とあった。系図は二つあり、第一尚氏と第二尚氏とに分かれている。

沖縄は好きだけれど、正直、歴史にはまったく興味のない藍那は首をひねった。

「さっぱり、判らないわね」

こんなことなら、少しは沖縄の歴史を勉強しておくんだったと今更ながらに後悔する。　と、第二尚氏系図の中ほどに藍那はハッと眼を止めた。

「なに、これー」
何代目かの王の子女の欄が妙な書き方をされていることに気づいた。歴代王は何代目の王かを名前下の数字で示している。が、その中で王だとされながらも、数字がついてない王がいるのだ。しかも、その尚正王の名の上下には？マークが付いている。
王でありながら、何代目かの記述はなく、事実、王位は数字のついた王から王へと譲られていったように系図には記載されている。一体、これは何なのだろう。系図では王と名が付きながら、歴代王の中には数えられていないー、そんな王がいる？
そのときだった。軽い目眩(めまい)がして、藍那はこめかみを片手で押さえた。自分の周囲の空間がグニャリと歪んだような気がして、思わず何かに縋ろうとして手を差しのべるも、当然ながら、そこには何もなかった。
ー転んじゃう。
そう思っても遅い。藍那の小柄な身体がつんのめり、身体を強く床に打ちつけるしかないと覚悟を決めた寸前、その代わりに彼女は突如として生温い水の中に放り込まれたような感覚を覚えた。
く、苦しいっ。呼吸ができない。藍那は酸欠の金魚のように咽を押さえ、口をぱくぱくさせた。目眩はますます烈しくなってきて、固く瞑った瞼の裏でチカチカと白い光が瞬いている。周囲の水が身体に絡まりついてくるような感覚がかなり続いた後、彼女はまた唐突に水底(みなそこ)から陸(おか)に打ち上げられたかのような錯覚を憶えた。
同時に息苦しさもなくなり、目眩も徐々に治まってきた。かと思いきや、救いを求めて差しのべた手がしっかりと掴まれた。
「大丈夫か？」
聞き憶えのない声に、藍那は恐る恐る眼を開く。眼前にいるのはーいや、正しく言えば横たわっているのは、若い男だった。年の頃は藍那とあまり変わらないだろう。十八、九くらい？　まあ、二十歳前後だ。
「あ、私？」
藍那は慌てて周囲を見回した。何だろう、見覚えのないこの感じは。今、自分がいる部屋もその内装も何だか随分と時代がかっている。しかも、布団に横たわっているこの男の格好はどう見ても、現代のものじゃない。

Ｆａｌｌ　ｉｎ　ｌｏｖｅ～恋に落ちて～
　藍那は男をまじまじと見つめた。よくよく見ると、室内はかなり豪奢な飾り付けがしてある。黒塗りの大きな棚には螺鈿細工が施され、牡丹に戯れかける一対の蝶。背景の襖は金龍が勇壮に天を翔ている図柄が描き出されている。　男が寝ているのは絹の布団で、美しい刺繍で彩られていた
。 ーまさか、ここは現代ではないの！？
刹那、一旦は治まった目眩がまた襲ってくる。クラリとしかけた藍那を、男の声が辛うじて支えた。
「大事ないか？　真戸那」
「まこーな？」
　呼ばれた名は宮田藍那という十七年間、慣れ親しんだものではなく、そのことは藍那を余計に戸惑わせた。
「私は」
　言いかけた藍那を男が痛ましげに見つめる。
「可哀想に、連日の看病疲れで混乱しているのだな」
どうやら、相手は藍那が一時的なパニック状態に陥っていると都合良く勘違いしているらしい。なので、藍那は慎重に言葉を選びながら訊ねた。
「あのー、ここは何時代ですか？　っていうか、まさかタイムスリップなんてあるわけないし、ここは何かの時代劇ドラマのロケ現場とか？」
　と、若い男が低い笑い声を立てた。
「相も変わらず、そなたは面白きことを言って、私を愉しませてくれる。だが、今の戯れ言は私にもとんと理解できぬぞ」
そこで、藍那は愕然とした。改めて自分の身なりの異常さに気づいたのである。可愛らしいピンク地に極彩色の牡丹や鳳凰が大胆に描き出されている打ち掛けは確か紅型(びんがた)という沖縄に昔から伝わる伝統的な着物である。「ー！」
　慌てて髪に軽く触れると、背中まであるロングはお団子状に頭上で一つに纏めている。まさか、自分まで時代劇にエキストラとして出演しているのだろうか。　ますます混乱して、藍那は横たわったままの男を見つめた。
「ここは、どこなんですか？」
　刹那、男が何かの痛みを堪えるように眼を伏せた。

「真戸那、そなたは一」
　男は小さく首を振り、優しげな眼で藍那を見返す。その漆黒のどこか一抹の儚さを秘めた瞳に見つめられると、こんなときなのに、藍那はドキンと小さく心臓が跳ねるようで。
　思わず頬が熱くなり視線を逸らしてしまった。
「たとえ一時とはいえ、良人たる私を忘れてしまうとは、よほど疲れているのだろう。もう私は大丈夫だ。このとおり、意識もしっかりとしておるゆえ、そなたは下がって少し寝みなさい」
　良人？　良人って、旦那さんのことよね。と、何か場違いなことを考える。でも、高校二年、十七歳の宮田藍那が真戸那という名前で、もう結婚しているなんて、あり得ない。
　一縷の望みを抱いていたのだけれど、ここまで来てはドラマのロケ潜入とかドッキリカメラという線は除外した方が良さそうだ。
　ということは、タイムスリップ？　漫画なら、まさしくその部分だけ大文字になりそうなほどの烈しい愕きが湧き上がってくる。
　　藍那は内心の愕きを懸命に抑えた。頼りになるのは今はこの男だけだし、引き出せる情報は少しでも多く引き出した方が良い。そう思っていたのだが。
　男が口にしたのは更に藍那を追いつめるものだった。
「そなたと私は半年前、婚儀を挙げたばかりではないか。そなたはこの琉球国王の妻、王妃にして国の母ぞ。しっかりと気を持つのだ」
　最早、限界だった。藍那の意識はそこでプツリと切れた。
「真戸那っ？　真戸那」
　男の狼狽した叫びが聞こえてくる。藍那は薄れゆく意識の底で考えていた。
　こんなことがあるはずがないもの。きっと目覚めたら、全部、夢だったと気づくはずよ。
　その一方で、黒い瞳をした、どこか淋しげなあの若い男には二度と逢えないのが物足りないような気がしていた。　　次に目覚めた時、藍那は別室にいた。広い座敷のような場所にやはり立派な布団が敷かれ、藍那はそこに寝かされていた。傍らに四十過ぎと思しき女性が端座している。紅い上衣とその下に白い着物を着ているようだ。髪は藍那と同じように頭上で一つに纏めている。
一確か、琉球髷っていうんだったけ。
　沖縄の祖母の家には、テレビの上に琉球人形が飾ってあった。藍那や眼前の女の格好は、その人形と同じものだ。これは琉装といい、沖縄がまだ琉球王国と呼ばれていた時代の民族衣装である。

「ああ、お気づきになりましたか？」
　女は心底から安堵したように微笑み、幾度も頷いて見せた。
「王妃さまは首里天加那志（しゅりてんがなし）のご看病の途中、お倒れになったのでございます」
　女は王妃第一の側近、女官大勢頭部（おおせとべ）と名乗った。大勢頭部とは御内原（おうちばら）を統括する女官の最高位である。御内原とは首里城の後宮で、どうやら大勢頭部とは後宮女官長のようなものだと認識できる。　もちろん、これらの知識は藍那にはまったくない。大勢頭部がかいつまんで解り易く教えてくれたのである。
「首里天加那志は王妃さまがご看病とご心痛のあまり、一時的な記憶喪失になったのではと仰せでした。ゆえに、王妃さまのなくされた記憶が戻るまで、常にお側に控えている私が何くれとなくお助けするようにと」
　つまり、忘れた―というより、本来、現代から来た藍那がこの時代のことを憶えているはずもないのだが―一切の記憶をお側去らずの女官長に教えて貰えという王の命なのだろう。
「首里天加那志は、私以外に王妃さまの記憶喪失のことは一切他言してはならぬときつく仰せにございます」「判りました」
藍那はもう、タイムスリップについて、この時代の人に告げるのは止めた。向こうが体よく記憶喪失だと思い込んでいるのなら、そういうことにしておいた方が無難だからだ。
　そこで、早速、この女官長から情報を引き出すことにした。女官長は王妃に心からの忠誠を誓っているらしく、矢継ぎ早に訊ねても嫌な顔も不審そうな様子もなく一つ一つ丁寧に答えてくれた。
「王妃さまはのお父君は朝親方にございます」
　朝親方は表十五人衆（重臣）の筆頭格とされている。真戸那はその一人娘で、まだ幼時に現国王が世子であった時代に婚約した。現王の名は尚正(しようせい)、半年前に父王が四十歳で突如として亡くなり、十九歳の若さで即位した。　琉球は他国の朝鮮と同じく大国清の皇帝からの許しを得て初めて国王と認められる。尚正はまだその容認を得てはいないので、正式な即位式は行っていない。
　尚正の婚姻は先代王の喪中ゆえ簡素に行われた。いずれ清国の容認を得て即位式を行った後に、こちらも盛大な華燭が執り行われる予定となっている。

「首里天加那志はご幼少の砌より、ご病弱であらせられ、王妃さまはいたくご憂慮されておりました」
　女官長によれば、真戸那と尚正王はそれは仲睦まじい夫婦であったらしい。それが元々病弱であった王の健康状態がここ一、二ヶ月、とみに悪化の一途を辿っていた。
　王妃は心から案じて常に病床に伏す王の側に侍り、真心から看病に当たった。その献身ぶりは周囲の者も涙するほどだった。看護されている王の方が日に日にやつれていく王妃を気遣う有様だったという。　王は昨夜から高熱を発し、熱は高くなる一方だった。侍医も様々な手を尽くしたものの、効果なく、王妃は夜も眠らず側に付き添った。そして一夜明けて、やっと昏睡状態にあった王が意識を取り戻した時、安堵のあまり、一時的な錯乱により〝物忘れ〟にかかってしまった一というのが王なりの解釈らしい。
「ご看護の疲れでうたた寝をなさっている王妃さまが目覚められ、記憶をなくされているとお知りになったときは首里天加那志も随分と愕かれたようでございますが、すべては病弱な良人である我が身のせいだとかえってご自分を責めておいでです」
　その女官長の言葉には胸をつかれた。あの青年の眼がどこか哀しげなのは、やはり事情があったのだ。生まれながらに王となるべくして生まれながら、国王の重責に堪えられないほど身体が弱かった。
　十八歳まで生きられるかと侍医に言われ続け、それでも周囲の懸命な傅育によってつつがなく成長し、王となった。なのに、王となってから何とかこれまで事なきを得ていたのに、体調を崩してしまった。それは、やはり、国王という立場がこの青年一人で背負うには重すぎるものだったのだろう。
若い王は幼いときに親が決めた妻を愛しみ、妻もまた病弱な王を献身的に支えようとしていた。王は妻が記憶喪失になったのは、病弱な自分のせいだと自分を責めているという。そこまで妻を追いつめた自分の弱さが許せないと、気を失った藍那が運ばれていった後、泣いていたと女官長は教えてくれた。
　藍那の眼に、初めて逢った時一藍那は王の妻の真戸那であるのだから、この場合、そういう言い方は妙だが一の王の黒い瞳が甦った。どこか淋しげな瞳を持つあの男なら、なるほど、看護で倒れた妻の弱さを詰るよりは、妻を疲れさせてしまった自分の病弱さを許せないと思うだろう。そんな男だと言われても、素直に頷けた。

藍那はそっと身を起こす。慌てて女官長が寄ってきて脇から支えてくれた。
「ガジュマルね」
王妃の寝室は今、障子が大きく開け放たれており、庭が一望に見渡せた。
そこは小庭になっているらしく、均等な石でぐるりと周囲を囲われた中に、大きなガジュマルが植わっている。
夏なのか、温かな南国の陽は長く、夕刻だろうのに、オレンジ色の夕陽が庭一面を温かな色に染めていた。もしこれが本当にタイムスリップだというなら、飛ばされてきた時代と自分がいた現代、奇しくも季節だけはほほど一致していたことになる。
どうやら、自分は間違いなく沖縄がまだ琉球王国と呼ばれていた遠い過去に迷い込んでしまったらしい。何故、この時代からはるか後の時代に生きる女子高生の自分が琉球国王妃と入れ替わったのかどうかは判らない。
ーああ、あの本。
この時代に飛ばされる前、藍那は図書館で歴史のリポートを書くための文献を調べていた。それで、あの本〝琉球王国の落日〟が何となく気になって、手にしたのだ。あの本の最初のページに琉球王室の系図があってー。そこに王として名前が記載されていながら、実際には即位した王として数えられていない不思議な王の名前を発見した。 ー確か、その王の名前が尚正王だったわ。
あの本のせいで何か不思議な力に導かれ、自分は失われた歴史の狭間に迷い込んでしまったのかもしれない。　もちろん、科学的にはあり得ない話だが、文明の発達した二十一世紀においても、まだまだ解明されていない謎は多い。まさに今、自分が体験しているのが単なる白昼夢だと片付けられるかどうかは判らない。
つまり、今、この瞬間、藍那はかつて過去に起きた出来事を体感しているのだ。琉球国王尚正の妻、王妃真戸那の生涯のほんの一部を追体験しているといえば良いのか。
もっとも、真戸那がどのような人生を辿ったのか、何歳で亡くなったのかも藍那は知らない。現段階では、王妃真戸那の人生のほんの一部を追体験するのか、それとも、もっと長い期間の記憶を共有することになるのかは予想もつかない。
この時代にいる時間が長くなればなるほど、藍那は元いた時代に帰るのが遅くなる。それはあまり歓迎したくないことではある。だが、あの孤独な眼をした若い王とは真戸那ではなく藍那自身として、もう少し喋ってみたいと思う。タイムスリップという奇跡が起こした中での出逢いだとしても、この出逢いを無駄にしてはならないような気持ちがしてならない。

いや、正直に言おう、藍那自身が一人の女として尚正王に何か惹かれるものを感じていたからだ。だから、まだ現代には帰りたくないと思うのだ。
もしかしたら、もう現代には二度と帰れないのでは一その怖ろしい考えはとりあえず頭から追い出すことにした。王も女官長も藍那がこの時代について何も知らないのは物忘れだと思っている。
ならば、それを利用すれば良い。ここにいる間にこの時代や尚正王について色々と知る努力をすることが現代に帰ってから、歴史のレポートを書くための下準備になるだろう。
また、それとは別に、あの淋しげな若い王のために何か自分ができることがあるのなら、してあげたいとも思う藍那だった。
ガジュマルの木は樹齢も相当なのだろうか。夕陽を浴びて立つその様は年を経て思索に耽る穏やかな老人のようだ。風格すら感じさせる南国の巨木は夕陽の色にすっぽりと包まれ、あたかも樹全体が黄金色に輝いているようにも見える。　藍那は眼を細めてガジュマルを眺めながら、こんなとんでもない状況に遭遇した自分自身が意外に落ち着いていることに自分で愕いていた。

Ｔｈｅ　ｗｉｎｄ　ｏｆ　Ｒｙｕｋｙｕ～琉球の風～

翌日から、藍那は起き出して毎日、良人である尚正王の許に通った。食事のときは傍らに座り、給仕をする。食後には 薬湯を甲斐甲斐しく飲ませ、発熱したときには寄り添い、常に王の額に心地よく冷たい手ぬぐいを載せるようにした。

氷の砕いたものに果汁をかけた氷菓子を匙でひと口ずつ口に運び、汗の雫が浮いた王の顔を丁寧に拭う。その世話ぶりは女官長を初め御内原の女官や王の重臣たちに思わず涙させるほどのものであった。

少し調子の良いときには、王が床の上に身を起こし、王妃と仲良く話し込む姿に周囲の者たちは心和ませた。十九歳の王と十七歳の王妃は側で見る者をも思わず微笑ませるほど仲睦まじかった。　実際、藍那は尚正王と様々な話をした。藍那には、こちらの時代の記憶（知識）は一切ない。元々、この時代から二百年ほど後の現代から来たのだから当たり前のことだ。

王は初め、藍那の記憶喪失がここまで酷いものだとは考えていなかったようである。藍那がすべて一共に過ごした婚約時代も含めて一を忘れ去っているのをいたく哀しんだ。

だが、本来、心優しい人なのだろう。

一私より、そなたの方がよほど混乱し、哀しんでいるに違いない。

と、特に訝る様子もなく、いっそう藍那に優しく接するようになった。王は面倒がらず、自分たちが幼い頃からどのようにして関係を育んできたかを語った。そのお陰で、藍那はあたかも自分が本物の真戸那であるかのように、彼と彼女(真戸那)が過ごした長い年月や心愉しい想い出を共有することができた。

もっとも、彼が真戸那との想い出を生き生きと語る表情に何か言い知れない、自分でも掴みかねる複雑な想いを抱くこともあったけれど。

藍那がこの時代に来て、ひと月が経とうしていたある日。

藍那は王と共にこっそりと王宮を抜け出した。どうしても海が見たいという彼のために、女官長を説得したのである。

必ず危険が及ぶようなことはしないこと、変わったことがあれば、すぐに王宮に知らせることをくどいほど約束し、女官長は何とか二人が王宮を出られるように取り計らってくれた。

市には様々な露店が並び、人が溢れ、活気に満ちている。はるかな昔、失われた歴史の中で、この琉球という国が栄えていたことをこの眼で見るのは何ともいえない気持ちになった。人の生きた証を間近に見ることは、かくも敬虔な心持ちになるものなのだろうか。

二人共に良家の若夫婦といった出で立ちで、上物ではあっても目立たない格好をしている。まさか仲睦まじげに寄り添って歩く若い夫婦が国王と王妃であるとは誰も想像していないに違いない。現に、往来を歩く二人に、露天商は気軽に声をかけてきた。その度に二人顔を見合わせて微笑み合うのも愉しかった。

　市を抜けて近くの海まで来ると、王の提案で二人は裸足になった。
細やかな白砂が果てなく続き、海はよく磨いたブルーサファイアのように深い色を湛えて澄み渡っている。
　藍那は着物の裾を絡げ、波打ち際を走る。惜しげもなく白い膚を陽光の下に晒す妻を、彼は眩しげな視線で見つめた。もちろん、藍那自身は若い王の熱い視線にはまるで気づいていない。
　王が追いかけていたかと思うと、ふいに立ち止まった。少し苦しげな表情をするので、藍那は心配になる。
「大丈夫ですか？」
　と、突如として浅瀬にいた王が笑いながら海の水を掬って藍那にかけた。
「まあ、酷い。人を心配させておいて、こんな悪戯をなさるなんて」
　藍那も負けずに海の水を両手のひらで掬い、王に向かってかける。勢いよく飛沫を上げた水はまもとに王の顔に直撃した。
「やったな。このお転婆娘」
　今度は王がまた藍那に水の攻撃を仕掛けてくる。こんな調子で二人はかなり長い間、幼子のように他愛ない応酬を繰り広げていた。
　その後は、二人で砂浜にしゃがみ込み、貝殻を拾い集めた。
「ほら、真戸那。見てごらん。砂が星の形をしているだろう？」　王が掬ったものをそっと藍那の手にのせた。「星砂ですね？」
「そなたも琉球に生まれた女であれば、耳にしたことがあるだろう？　昔、若い王に身分違いの恋をした娘が流した涙が星の砂となったのだという伝説を」
　ふいに、王が自分をじいっと見つめているのに気づき、藍那は頬を紅くした。
「真戸那は私を好きか？」
「えー」
唐突な問いには応えられるものではなかった。大体、この時代に来て一彼と知り合ってから日が浅すぎる。しかし、王は続けた。
「私のために泣いてくれるほど、そなたは私を想っているだろうか」
　藍那が応えないのを彼は誤解してしまったらしい。彼女が口を開く前に、笑った。
「いや、つまらぬ話をした。今のことは忘れてくれ」
　王はそれから不自然なほど素早く話題を変えた。それは嫌で堪らない仕事を早く片付けてしまいたいとでもいうような態度だった。
「真戸那、私たち琉球の民は皆、死ねば海へ還ると言われている。永遠の安息を得るのに、国王も民も関係ない。私もそなたもいずれ生涯を終えた後は、ここに還るのであろうな」

と、藍那はひとりでに応えていた。
「首里天加那志が琉球の美しき海だといわれるのであれば、私は風です。この海を優しく吹き渡る琉球の風となり、あなたさまのお心をお慰めするでしょう」
まるで自分ではない誰かが一他人が自分の身体を借りて話しているような妙な感覚だった。
「国王が海で王妃が海を渡る風、か」
王はこの応えがとても気に入ったらしい。先ほどの落胆した様子が嘘のように明るい表情を取り戻していた。
その日、藍那は王と一緒に拾った小さな星砂を二個だけ記念に持って帰った。
あまりに二人だけの時間(デート)が愉しすぎて、王宮に帰るのはかなり遅く日暮れ時になってしまった。女官長は蒼い顔で二人の帰りを待ちわびており、やっと帰ってきた国王夫妻の無事な姿を見て、涙を流さんばかりに歓んだ。この一件で、藍那は自分がどれだけこの信頼できる女官長に負担をかけていたかを悟った。
更にそれから数日後。　王と藍那は二人並んで縁近くに座っていた。もちろん、障子戸はすべて開け放している。王の寝所も王妃のそれと似たような造りで、部屋からは広大な庭園が臨める。綺麗な丸石で囲まれた中に巨大なガジュマルが見えた。　藍那は今、そのガジュマルを眺めながら、王に微笑みかけた。
「不思議ですわ」
「何が？」
王が夜着ではなく、抑えた黄金色の着物にに朱色の帯を前に結んだ姿で彼女の隣に座っている。
ここのところ、王の健康状態は小康を保っていた。侍医はこの分では完全な床上げも間近ではないかと診立て、周囲は漸く愁眉を開こうとしていた。
「樹にも様々な表情があるのだと思って、このガジュマルを眺めていたのです」
「樹に表情があると？」
「はい」
藍那は微笑み頷き、視線を王から庭先へと向ける。
「このご寝所からの眺めは私の部屋からのものとよく似ています。ちょっと見た目はまったく変わり映えがないように思える樹でも、よくよく見ると、実はまったく違う別の表情を持っていると感じるのです」
「そういえば、そうだな。一見同じに見える草木も注意深く見れば、それぞれに表情が違う」
王は笑って頷いた。

「何だか、まるで私たち人間と同じだと思うと、樹も生きているのだと改めて思います」
　まだ樹を眺めたままの藍那に、王が頷いた。
「王妃にはいつもながら愕かされる。誰もが思いもつかないようなことを突然、言い出すのだから」
　藍那が小首を傾げた。
「おいやですーか？」
　王は屈託ない笑顔をひろげた。
「いや、その反対だ。そなたと共にいると、愉しい。何というか、次に何が起こるか、そなたが何を言い出すか予想も付かなくて、わくわくしてしまう。まるで幼いときに母上の眼を盗んで、二人で宮殿を抜け出して町に行ったときみたいだ」
　その話を藍那は王から聞いていた。もちろん、それを経験したのは藍那ではなく、真戸那ではあるが。
　恐らく、藍那の外見は真戸那と似ているのだろう。この時代に来て鏡で何度も自分を見ているけれど、紅型の着物を纏い髪を結い上げてはいても、顔は見憶えある自分のものだ。
　或いは、信じがたい話ではるが、藍那自身が真戸那の生まれ変わりであるとか。だからこそ、あの〝琉球王国の落日〟という本を通じて、前世の自分が生きていた時代へとタイムスリップしたのかもしれない。
　王の想い出話では、当時、八歳と六歳であった二人は大人の眼を掠めて二人で王宮を抜け出したのだという。市を冷やかして様々な露店を眺めていた時、王が真戸那に安物の簪を買ってくれた。真戸那が物珍しそうに眺めていたのは、珊瑚の簪であった。
　夕陽の色を閉じ込めたような円い小さな玉がついた簡素なものだったが、真戸那はその日の想い出として今も大切にしているそうだ。 ーそなたの部屋の宝石箱にしまってあるはずだ。
　王に教えられ、藍那は自室の宝石箱を開けてみた。すると、本当に彼の言葉通り、小さな珊瑚玉の簪が出てきた。　その時、藍那は、まだ見たことのない自分と同じ顔をした王妃に言いしれぬ苛立ちを感じた。
　真戸那は長い年月を彼と共に過ごし、彼のかけがえのない存在となっている。自分は所詮、他の時代から飛ばされてきた一時の身代わりにしかすぎない。
　簪を買った後、王は何と隣の店の男から酒を飲まされた。貴族の子弟がお忍びで遊び歩いていると思われ、からかわれたのだ。甘い果汁だと騙されて泡盛を呑まされ酔っぱらった王はその場に引っ繰り返った。丁度、王宮に王子と遊びに来ていた許婚の姫がいないことを知り、慌てた傅育係が探しにきたから良かったようなものの、少し間違えば大変なことになっていた。

王宮に連れ帰られた王子と姫はこっぴどく怒られた。もちろん、王子は父王と母王妃に、姫は屋敷に戻ってから両親に。
ーしかし、あのときほど愉しかったことはない。
王がさも嬉しげに語る横顔に、藍那は心がどす黒い感情に染まっていった。
私の前でそんな表情をしないで。
同じ姿をしていても、同じ人間だと思われていても、自分は真戸那ではない。自分の前で別の女との想い出を愉しげに語る王を見ているのは辛かった。
その時、藍那は悟ったのだ。
私、王さまを好きになったんだー。いや、多分、この時代に来て初めて彼の少し淋しげな瞳に見つめられたときから、恋は始まっていたのだ。
王が嬉しげに語る想い出の中の女の子が自分だったら良かったのに。藍那の脳裏に一つの情景が浮かんでいた。しっかりと小さな手と手をつなぎあわせ、露店を覗く男の子と女の子がいる。小間物屋で珊瑚の簪を熱心に眺める女の子を嬉しそうに見つめる男の子。遠い日の真戸那と王であった。
親に決められた政略結婚でありながら、幼いときから恋を育み、誰もが羨む結婚をした稀に見る幸せな恋人たちだ。
そのときの話を思い出すと、どうしても沈んでしまう。想いに耽っている藍那の耳を王の声が打つ。
「そなたの申すことは奇抜でも、筋が通っている。よくよく考えれば、皆、正しい。そなたと話しているといつもハッとして、どんな物事も最初から決めつけて眺めてはいけないと固定観念の怖ろしさを感じる。思い込むということは怖ろしいことだ」
一陣の風が髪を嬲ってゆく。
かすかに潮の匂いを含んだこの風を藍那はずっと愛してきた。それは紛うことなく真戸那の記憶ではなく、藍那のものだ。藍那は幼い頃、母に連れられて毎年訪れていた沖縄の風を心から愛していた。故郷の北の街の淀んだ重たい灰色の空気、その空気を震わせる冷たい風とは全然違う。
気まぐれな風は藍那の髪を揺らし、二人の間をあっという間に通り過ぎていった。
王がつと手を伸ばした。藍那の少し乱れて頬にかかった髪のひとすじに触れる。
「髪が乱れている」
呟き、その髪を丁寧に撫でつけた。妙なことだった。王は別に身体に触れたわけでもなく、ほんの一瞬、指先で髪の毛に触れただけなのに、彼の手を感じた瞬間、藍那はまるで雷に打たれたようなショックを憶えた。
「私は琉球の風が好きだ」
王は藍那からあっさりと手を放し、自分も庭のガジュマルを、更にこの国を守る蒼い海の色をそっくりそのまま映したかのような空を眺めた。

何故、王さまの手が離れたら、私は淋しいと思うのだろう？
もっと触れていて欲しいと願うだなんて、私は何を考えているんだろう。
自分がこの年若い王を好きになってしまったという自覚はあれども、まだまだ藍那自身がその気持ちに追いつけないでいた。
「私も琉球の風が好きです。子どもの頃から、海の香りを運んできてくれるこの風が大好きでした」
王が心底嬉しげに微笑んだ。
「記憶を失っていても、そなたは以前と同じことを言うのだな」
「私がそのようなことを？」
「ああ、いつも私に言っていたよ。この美しい国に生まれて幸せだ、自分を育んでくれた琉球の風が大好きだと話していた」
「ー」
何も言えず、藍那は黙り込んだ。しばらく二人は見つめ合った。
「私もいつも言っていた。そなたと同じで、琉球の風が好きだと、そして、そなたという美しく得難い女を育んでくれた、この国のすべてが愛おしい。私は王だから、この国や民を愛しているのは当然だ。でも、愛するそなたが暮らしている国だと思えば、なおいっそうこの国を守りたいと思う。それは国を想う王としての立場とはまったく別の一人の男としての気持ちだよ」
ふいに引き寄せられ、藍那は身を強ばらせた。王の顔がゆっくりと近づいてくる。
十九歳の王はかなり整った顔立ちをしている。そう、現代でいえば、小栗旬か、嵐の二宮君に似てるかな、なんて馬鹿なことを考えている中に、彼はいっそう近づいてきた。　思わず現実に返る。唇の触れる寸前に、藍那は焦って顔を背けてしまった。
「ごめんなさい！」
まるで身体中の血が顔に集まったような感じ。多分、王にも今、自分が真っ赤になっているのは判るだろう。
王は淡く微笑み、藍那から手を放した。
「いいんだ。私たちはまだ真実の意味で契りを交わしていない。そなたが怖がるのも無理はないと判っている」　刹那、藍那は弾かれたように顔を上げた。
ー真実の意味で契りを交わしていない。
つまりは、まだ国王夫妻は男女の関係になっていないということだ。　長い間の婚約期間を経て、恋仲になって結ばれた二人である。ましてや夫婦なのだから、とっくにと思っていたのだけれど、どうやら違うようである。
ー女官長の話では皆が羨むほど仲良し夫婦だったっていうのに、何でかな？
藍那の心に小さな疑問が兆した。それとも、あまりに幼いときから一緒に長くいたから、仲が良いというのは異性間の恋愛というより兄妹のようなものになってしまったのか？

訝しく思いながら考えていると、何を思ったか、王が立ち上がる。
「散歩にいこう」
「よろしいのですか？　お身体が心配です」
それは心からの言葉であった。まずは侍医の許可を得てからの方がよいのではないだろうか。心配が顔に出ていたのだろう、王が笑いながら人差し指で藍那の頬をつついた。
「私は情けない男だな。庭をそぞろ歩くのでさえ、妻をこれだけ心配させなければならない。だが、案ずる必要はない。今日はいつになく調子が良いのだ。ほんの一刻なら、構わないだろう」
王が藍那の手を握った。
「では、せめて誰か伴の者をお連れ下さいませ」
王が破顔した。
「余計な邪魔はされたくない。私はそなたと二人きりが良い」
まるで我が儘な駄々っ子だが、よく見ると。王の整った面には悪戯っぽい笑みが浮かんでいた。
ああ、反則。こんな表情されたら、女は誰だって、言うことをきいてあげたくなるんだから！
藍那は内心、溜息をつきたい想いで頷くしかなかった。

　先に藍那が地面に降り、草履を突っかけ、王のための履き物をきちんと揃えて置いた。王は藍那を見て嬉しそうに笑い、草履を履く。また軽く手を握られ、藍那は心臓がバクバクと音を立て始めた。
そっと窺うが、王の方はいつもと同じようにごく自然体で手を繋いでいるように見える。王宮の庭園はとにかく広い。かなり歩いたのであろうと思われた頃、王の歩みが突如として止まった。
「そろそろ、この辺で良いだろう」
　王が独り言めいて呟き、懐から何やら取り出した。綺麗な色の風呂敷を解くと、おもむろに差し出す。
「あのときはまだ幼くて露店で売っているような安物しか買えなかったが、今は少しはマシなものが贈れるようになった」
　差し出されたのは大きな紅珊瑚を花の形に彫り込んだ簪であった。花びらの細い筋まで一つ一つ繊細に仕上げた職人技の光る逸品である。安物どころか、恐らく値は付けようがないのではと思われた。
「これを受け取ってくれ、真戸那」
　誕生日、おめでとう。
　次いで耳許で囁かれた刹那、藍那はハッとした。そういえば、今日は私の誕生日だった。愕いたことに、二百年前に、日本でいえば江戸時代末期に生きていた琉球王国の若い王妃は誕生日まで自分と同じだったらしい。

　でも、今はそんなことはあまり問題にはならないように思える。自分ですらすっかり忘れてしまっていた誕生日、十八歳になる記念すべき日を大好きな男がちゃんと憶えていてくれていたということが嬉しい。
「ありがとうーございます」
　藍那は溢れてきた涙を堪え切れず、人差し指で拭った。
　王の二宮君に似た顔に狼狽が走った。
「いかがしたのだ！　気に入らなかったのか？」
　藍那は泣き笑いの顔で首を振る。
「あんまり嬉しくて涙が出ました」
「急に泣き出すから、愕くではないか。まったく心臓に悪いぞ」
　王は口調とは裏腹に怒っている風もなく笑っている。彼の背後に、今を盛りと咲き誇る白い花があった。そういえば、庭園の奥まった一角には、それは筏葛（いかだかずら・ブーゲンビリア）が美しい場所があると女官長が話していたことを思い出す。確か、そのときには王も同席していたのではなかったのか。
　もしかしたら、彼は誕生日プレゼントを渡す場所はここでと予め決めていたのかもしれない。
　しかし、王の放った何気ないひと言に、藍那の顔色は変わった。
「ほ、本当に？　大丈夫でございますか！」
　王は単なる虚弱体質というだけではない。侍医によれば、かなりの箇所に生まれながらに疾患を持っているらしいのだが、その一つに心臓が悪いのだと聞いている。
　自分が不用意に泣いたことで王の持病が悪化してしまったのだとしたら。藍那が思わず泣きそうになって問うのに、王は人の悪い笑みを浮かべた。
「嘘だよ、嘘。真戸那は何でもすぐに信じるのだから、まったく幼い頃から少しも変わらない。子どもの頃、よくそうやって、そなたをからかって泣かせてばかりいては、母上に叱られたものだ」
　でも、そなたが私の身を泣くほど心配してくれているのは嬉しい。
　と、王は心底嬉しそうに言う。
　王がスと手を伸ばす。親指で頬をつたう涙を拭われている中に、ふと王の顔から笑みが消えた。真顔になった王が藍那の手を掴み、そっと引き寄せる。

「もう、逃げないか？」
恥ずかしさに頬を染めながらも、藍那は小さく頷くことで肯定の意を示した。王がにっこり笑って頷き返し、唇を重ねてくる。
　十八年間生きてきて、初めてのキスだった。ファーストキスは呆気ないくらい早く終わった。まるで蝶の羽根が掠めて通り過ぎたくらいの儚さで。
　またしても藍那はもう少しキスしてしい欲しいと瞬間的に考えしまい、自分のあまりのはしなたさに一人で紅くなった。　まだ初めてのキスの余韻に浸っていると、王が不安そうな顔で空を仰いだ。
「真戸那、そろそろ戻ろう。どうやら、ひと雨来そうだ」
　南国の天候は移り気な恋人のように変わりやすい。王がまた藍那の手を掴んだまさにその時、空が俄に曇り、雨滴が落ち始めた。先刻まで太陽が輝き、蒼穹がひろがっていたのが嘘のように不気味な黒雲が立ちこめている。]
　落ち始めた雨滴はあっという間に本格的な降りから大降りになった。
「何ということだ。とにかく、あそこへ行こう」
王の言う〝あそこ〟というのが何を示すのかは判らなかったけれど、手を掴まれたままで二人とも小走りに雨の中を駆け抜けた。
　直にその場所はすぐに判った。ひときわ大きなガジュマルが一本植わっている。王や藍那の部屋の前のガジュマルもかなりの大きさだと思っていたが、これは更に何倍も大きい。冗談ではなく、この国の王朝が始まった当時に植えられたのではないかとすら思ってしまう。
　その巨木の大人なら数人が手を繋げそうなほど太い幹の根元に、大きな洞(うろ)が空いている。真っ黒な闇空を背景に立つ樹はかなり不気味だ。丁度刻まれた瘤が人の貌の目鼻のように見え、ぽっかりと空いた洞が口のように見える。
　まるで不気味な魔物が口を大きく広げているようで、藍那は少しの躊躇いを見せた。
「何をしているんだ。早くあそこに入るのだ！」
　こうなると、流石に普段、人に命令し慣れた立場の人だと思わざるを得ない。王の声には逆らいがたい威厳があった。　藍那は殆ど引っ張られるように樹の洞に入り込んだ。

　そこは見た目よりは狭く、二人が膝を抱えて座れば一杯だった。王は周囲を興味深げに眺めながら言った。
「子どもの頃はよくここで隠れん坊をしたな。そなたに付き合って、ままごとをしたこともある」
　まただと、藍那の胸がツキンと痛んだ。この愉しい想い出を分かち合ったのは私じゃなくて、私と同じ顔をした王妃さまなんだ。 そう思うと、何だか少し悔しくて凄く哀しい。
　このイケメンの王さまはよほど新婚の奥さんのことが好きなんだと嫌というほど思い知らされる。王さまは藍那をその奥さんだと勘違いしているようだけれど、真実は全然違う。どんなに似ていたとしても、所詮は別人なのだから。 「思えば、あの頃から随分と年月が経った。可愛らしかっただけの少女が美しい色香溢れる女人となり、その頃、そなたより身の丈が低かった私が今では、そなたよりぐっと高い。あの頃は二人入っても、ここはまだ十分な余裕があったのに、今はもう手狭なほどだ。初恋を実らせた私は琉球王朝歴代の王の中でもいちばんの幸せ者だろうな」　　王の述懐を複雑な想いで聞いている中に、悪寒に見舞われ、藍那はクシュンと小さなくしゃみをした。次いで、寒さに身体を震わせる。
　めざとく気づいた王は綺麗な形の眉をひそめた。
「寒いのか？　震えているぞ」
　藍那は微笑んで首を振ろうとしたが、自分でもカタカタと震えているのが丸わかりだ。これではあまり説得力がない。
「夏とはいえ、これだけ濡れては冷えるからな」
　雨のせいか、気温も少し下がったようである。王はしばし思案顔だったが、やがて、自分はさっさと先に着物を脱いだ。もちろん、脱いだといっても、上だけで下の襦袢は着ている。が、彼は直に襦袢も上半身はあっさりと脱ぎ捨て、半裸になった。
　身体の弱い王とばかり思い込んでいたが、こうして裸になってみると、やはり十九歳の青年らしく、筋肉がほどよくついた均整の取れた体軀をしている。
　存外に逞しい身体をまともに見ていられず、藍那はつい視線を逸らした。
「真戸那も脱いだら？」
　え、と、藍那は大きな眼を一杯に見開く。

と、王が苦笑をその端正な面に上らせる。
「別に全部脱げと言ってるわけではない。濡れた着物を着たままでは重たいし身体は冷えるだけだ。せめて打ち掛けくらいは脱いだ方が良い」
「あ、はい」
自分は一体、何を勘違いしているのか。紅くなりながら、藍那は打ち掛けを脱いだ。しかし、震えは一向におさまる様子はなく、むしろ烈しくなっていく。
王がそんな藍那をじいっと見つめている。狭い洞の中に二人きりで、身体は殆どぴったりと隣り合っている。聞こえるのは雨の音と二人の息づかいだけ。何だか一挙に二人を包み込む空気の温度が上がったように思えるのは気のせい？
「真戸那、こんなことを言って誤解して欲しくないんだが、着物も上はもう一枚脱いでしまった方が良いのではないか？　このままでは本当に冗談ではなく風邪を引くぞ？」
王の言葉はもっともといえた。二百年前に風邪をこじらせて肺炎になったとしたら、果たして助かるのだろうか。極めて現実的な疑問に行き当たり、藍那は戸惑いながらも着物を脱ぐしかないと覚悟を決めた。
帯を解き、ゆっくりと脱いでゆくのを王が傍らで見つめている。また更に二人を包む空気が熱さを増したようだ。雨の音しか聞こえるもののない世界に響く衣擦れの音は、心なしか凄くエロティック(淫ら)に聞こえる。
やがて、パサリと音がして藍那は着物を過ぎ棄てた。とりあえず畳んで脇に置いた時、彼女は強い視線を感じた。　ハッと顔を上げると、熱を孕んだ王のまなざしとぶつかった。その時、漸く藍那は自分のあられもない姿に気づいたのだ。
もちろん着物を脱いだからといって、裸になったわけではない。下には肌襦袢を身に着けている。たとえ王に言われても襦袢までは脱ぐ気はなかったし、また王もそのようなことは言わないはずだ。
嫌がる娘に無体なことを強いるような男ではない。
しかし、これは想定外だった。濡れて肌に貼り付いた着物が身体の線をくっきりと浮かび上がらせている。もう殆ど成熟した乳房がはっきりとその存在を主張していた。この時代にはブラジャーなんてないから、もちろん、何も付けていない。だから、乳房の形や乳輪、薄紅色の乳首までが丸見えだ。　急に恥ずかしくなり、藍那は両手で自分の身体を抱くようにして膝を抱えた。うつむいていても、燃えるような熱い視線が自分の胸に向けられているのは判った。居心地の悪さと恐怖を感じて、震えは余計に烈しくなってしまう。

　まるで広い世界に今、この瞬間、王と自分以外の者は誰も存在しないような錯覚にさえ囚われる。大好きな男と二人だけの時間が嬉しいのか、それとも、いつになく烈しいまなざしで見つめてくる彼への恐怖が勝っているのか、藍那は次第に判らなくなるほど動揺していた。
　雨は止むどころか、ますます烈しさを増してゆく。遠くで雷鳴が轟く音さえ聞こえてきた。沈黙の中、雨音がひときわ大きくなったようにな気がした。
　唐突に強い力で抱き寄せられ、藍那は身を竦ませた。
「真戸那」
　王の声がかすかに掠れている。ハスキーなのに、どこか熱っぽく淫らに濡れている。まるで極上のベルベットで素肌をゆっくりと撫でられているかのようなゾクゾクする気持ちにさせられる一そんな声だ。
「逃げないで、私を受け容れてくれ」
　深い声に軽い酩酊感を感じている中に、いつしか王の顔が至近距離まで迫っていた。
　逃れようとして、後頭部をしっかりと押さえられる。背中に回された彼の手により強い力がこもり、藍那は壊れそうなほどきつく抱きしめられた。
　唇を塞がれた。ブーゲンビリアの傍らで交わしたファーストキスと違い、今度のはかなり濃厚だ。まだそんなことを考えている間は、余裕があったのだろう。
　一旦離れた唇はまたすかさず押し当てられ、口づけは延々と続く。角度を変えては執拗に塞がれ続けるので、息苦しくなった。
一苦しいっ。　涙眼になって逃れようとしても、しっかりと抱きかかえられているため、彼の腕の中から抜け出せない。
あまりの苦悶にもがき、唇がわずかに開いたその瞬間、彼の舌がすべり込んできた。
一何なの？
　口づけさえ、やっと二度目の藍那にとっては刺激の強すぎる体験だ。逃げ惑う舌を絡め取られ、強く吸い上げられる。彼のものか自分のものか判らない唾液が口から溢れて滴り落ちた。
　深く唇を結び合わせながら、王の手が次第に下に降りてくる。口づけに気を奪われている藍那はそのことに気づきもしない。
　胸を大きな手のひらですっぽりと包み込まれ、藍那は驚愕した。それだけでは終わらず、王の手はそっと包み込んだ乳房を優しく揉み始める。しばらく揉まれた挙げ句、濡れてはっきりと判る乳首をキュッと指で押された。
「一！」
　何か初めて経験するような感覚が胸の突起から身体の芯へと向かって駆け抜けていった。

「ーいや」
　藍那はか細い声で訴えた。大粒の涙が溢れ、頬をつたい落ちていった。
　その涙で、王は漸く我に返ったらしかった。
「済まない。どうも、二人だけで狭い場所に降りこめられて、どうかしていたようだ」
　王は自身を恥じ入るかのように言い、自然に藍那の方に手を伸ばした。
　刹那、藍那が怯えて身を退いたのを見て、淋しげに笑う。
「ごめん、真戸那。頼むから、私を怖がらないで」
　王は伸ばしかけた両手を引っこめ、溜息をついた。
「そなたが好きだ、愛している」
　その黒い瞳が揺れていた。
「言葉にはできないくらい、そなたを愛しいと思っている。私の身体が健康を取り戻したら、今度こそ本当の夫婦になりたい」
　王は首を振り、藍那を見つめた。
「私は不甲斐ない男だ。身体が弱いから、今まで夫婦となりながらも、そなたと寝所を共にすることもできなかった」　そのあまりにも儚い笑みに、藍那は切なくなった。
「いつか、きっとそんな日が来ます」
　思わず言わずにはいられなかったのだが、王は救われたような表情で頷く。
「そのときは、もう、そなたは私を拒んだりはしないか？」
　その問いで彼女は自分が何を言ったのかを悟り、真っ赤になった。しかし、期待に満ちた瞳を輝かせている彼に、到底、いやだとは言えなかった。それに、心のどこかで、もし本当にそんな日が来るのだとしたら、彼に抱かれても良いと思う自分がいることも確かだったのだ。
　そんな風に自分が考えているということそのそものが藍那には大きな愕きであった。
「私たちにはまだ十分、時間があります」
　藍那は言葉を選びながら、ゆっくりと言った。
王はそんな彼女に弱々しい笑みを返す。彼女の言葉に歓んだものの、その歓びも見る間に萎んだといった体に見えた。
「そうだと良いのだが。最近、何かに追い立てられているような気がしてならないんだ。自分にこの世で与えられた一そなたと共に過ごす時間が残り少ないような気がしてならない」
　最初、藍那にはその科白の意味を図りかねた。それは藍那がタイムスリップでこの時代に来た人間だから、いずれは元の時代に帰らないといけないことを何となく王が予感で感じているのかと思った。が、実はそうではないようだった。

　王は整った面を淋しげに沈ませた。
「私の生命の焔は燃え尽きる前の最後の輝きを放っているのではないかと思うことがある。いつになく今、調子がよいのもそのせいではないかと思うと、無性に怖くなる」
　いやと、彼が首を振った。
「そうではない、私が最も恐れるのは死ではなく、死によって、そなたと永遠に逢えなくなることだ」
　王がポツリと言った。
「女々しい男だろう？　これで琉球王国の頂点に立つ国王だというのだから、笑える」
　死にたくない。彼が次いで洩らした声はかすかに震えていた。
「怖いんだ。光もない闇ばかりの世界で、たった一人、もう二度とそなたにも逢えない。そんな日が来るのかと思うと、怖くて堪らない。私は今にも消えそうな蝋燭を身体の内に抱いて、細々と神に許された残り少ない日々を紡いでいっているんだよ、真戸那。こんな臆病な男、たとえ王だといえども、そなたに嫌われて当然だ。だが、その方がかえって良いのかもしれない。私を嫌いになれば、私がいなくなった後でも、そなたが哀しまなくても済む」
一私を嫌いになれば、私がいなくなった後でも、そなたが哀しまなくても済む。
　何という哀しい言葉だろう。藍那は涙が溢れそうになった。
「そんな哀しいことをおっしゃらないで下さい。私一真戸那が首里天加那志を嫌いになることなんて、未来永劫ありません。私はずっと、この世の終わりの日まで、あなたをお慕いしています」
　今だけは、よく似た真戸那という少女の身代わりでも良いと思った。こんなに孤独で淋しい男を少しでも慰めてあげられるのならば、大好きな男が求めてやまない女性のふりをするのも悪くはないと思ったのである。
「ありがとう、真戸那。私が愛したのは何もそなたの見かけの美しさや聡明さだけではない。幼い日、露店で買い求めた安物の簪を今でも後生大切にしてくれる一そういう、そなたの心の美しさ、優しさを何より愛したのだ。そのことだけは忘れないで欲しい」
　王は言い終えると、視線を動かし、洞の外を注意深く見つめている。いつしか雨音もすっかり止んでいた。
「どうやら雨が止んだようだ」
　先刻までの烈しさや儚さをまるで感じさせず、穏やかないつもどおりの口調に戻っている。そのことにどこか物足りなさを感じてしまう自分の心が不思議であった。

私はさっきのように王さまに情熱的に求められたり、淋しげな表情を見せて欲しいの？
自分自身に問いかけてみる。幾ら好きな相手でも自分の意思とは関係なく強引に押し倒されるのはむろんいやだ。でも、ちゃんとした手順を踏んでからなら―。
先刻、王にも言ったように、そうなっても良いと思う自分がいることに、またしても当惑する。また、孤独な素顔を見せてくれることについては、かえって嬉しいとさえ思う。もちろん、大好きな彼が哀しむ様を見たいわけではないけれど、歳の割には老成した若き王が自分だけに見せる素顔だと思えば、女としてはやはり心が浮き立ってくるのは当然かもしれなかった。
「雨も止んだことだし、早く戻ろう」
言いながら外に出た王は一瞬、眩しげに陽の光に手をかざし、振り向いて藍那を見て、いっそう眼を細めた。
「それにしても、お互いに酷い格好だ。私はともかく、真戸那のなりを見れば、一体、私たちの間に何があったのかと痛くもない腹を勘ぐられることになろう」
王は笑うと、藍那の纏っていた打ち掛けをそっと着せかけた。
「まだ乾いてはいないが、このまましどけない姿のそなたを他の者の眼に触れさせるのは我慢ならない。少し辛抱してくれ」
この男には似合わない少しばかりの独占欲を剥き出しにされ、くすぐったいような気持ちになる。
むろん、王自身も既に肌襦袢をきちんと着て生乾きの着物を羽織っている。
―一体、私たちの間に何があったのかと痛くもない腹を勘ぐられることになろう。
―しどけない姿のそなたを他の者の眼に触れさせるのは我慢ならない。
藍那はそれらの言葉がぐるぐると頭の中を渦巻き、羞恥のあまり、頭が沸騰しそうだ。
「何故だろう、いつも綺麗に装っているそなたよりも、今の方が艶やかで眩しく、眼が離せな―」
王が少年のように照れながら笑った。
その時、言い終えない中に、王の身体がガクリとよろめく。藍那よりはるかに長身の身体がゆっくりと傾ぎ、藍那は悲鳴を上げた。
「首里天加那志！」
藍那は叫び、咄嗟に王の身体を横から抱き止めた。しかし、どうしても藍那の方が引っ張られて一緒に倒れる形になった。とはいえ、そのせいで、間一髪、王の身体が地面に激突することだけは免れた。
「首里天加那志っ。しっかりなさって下さい」
藍那は夢中で王を呼びながら、ともすれば、自分までもがよろけそうになりながら、その重みを渾身の力で受け止め支えた。王の身体は愕くほど熱かった。
そういえば、と、藍那は改めて思う。先刻、藍那を強く抱き寄せて唇を奪ってきたときの彼の身体も少し熱かった。あの熱は欲情だけではない、発熱のせいもあったのだ。藍那はそれに気づかなかった自分の愚かさを心底から悔やんだ。

Ｆｏｒｅｖｅｒ～永遠～

結局、それからほどなく王と藍那は探しにきた重臣に見つかった。若き国王夫妻の姿が王宮にないことが知れ、王宮内は大騒ぎになった。直ちに表御殿や御内原と王宮内で大捜索が行われたものの、二人の姿が見つからない。　まだ世継ぎもいない若い王である。王宮内が憂愁に閉ざされようとした時、王妃の側近である女官大勢登部が国相（琉球王府最高の官職）にひそかに進言した。

女官長は数日前、王妃に庭の奥にはブーゲンビリアの美しい花が今、盛りだと話したことを思い出したのである。 一首里天加那志と王妃さまはもしや、奥庭においでなのやもしれません。

そのひと言で捜索の手は奥庭にまでひろげられ、やっと国王夫妻が見つかったのである。

だが、王は発見された時、高熱を発し、意識は朦朧とした状態であった。

王妃（藍那）の徹夜の看病が再び始まった。

一首里天加那志のご病状思わしくなきは王妃さまが庭の筏葛をご覧になりたいとねだられたからだそうだぞ。

いつしか王宮内ではそんな噂が真しやかに飛び交うようになっていた。女官長が筏葛の話を国王夫妻にした時、傍らに若い女官が控えていた。その女官が不用意に洩らした噂が元となったのである。事実無根ではあるけれど、誰もが藍那を冷たい眼で見つめるようになった。

ただ一人、女官長だけが藍那の味方であった。

「私は王妃さまのお人柄をよく存じ上げております。王妃さまがそのような我が儘をお身体の弱い首里天加那志におっしゃるとは到底信じられません。本当に申し訳ございませんでした。私が奥庭について首里天加那志に余計なことを申し上げてしまったばかりに」

長年、御内原にいる彼女は、すべてを見抜いているようである。むしろ余計な話をした自分が悪いのだと責任を感じていた。

藍那はそれに対しては微笑んで否定した。

「それは違うわ。散歩に二人だけで行こうとおっしゃった首里天加那志をお止めしなかったのは他ならない私なんだもの。だから、やはり、今回の一件は私に責任があるとしか言いようがないでしょ」

「お労しい。王妃さまのようなお方こそ、まさに世子さまのご生母さまとなり、真の意味での国母さまとなるにふさわしき方でございますのに」

その先は女官長は言わなかったが、結婚後半年を経てもいまだに王と王妃が寝所を共にしていないことを指しているのは明らかであった。

主従がそんなやりとりを交わしたその日の夕刻、王が五日ぶりに意識を取り戻した。一時は危篤かといわれていただけに、重臣たちを初め王宮の者たちの顔には皆、一様に安堵の表情が浮かんでいた。
「何かお召し上がりになりたいものは、ございますか？」
耳許で問えば、王は小さな声で〝氷菓子〟とお応えになる。
藍那はすぐに氷菓子を用意させた。細かく砕いた氷を琉球ガラスの見た目も涼やかな器に盛り、南国の恵みの果汁をたっぷりとかけたものだ。以前からの王の好物である。
銀の匙でひと口ずつ、横たわった王の口許に運びながら、藍那は不覚にも涙が出てくるのを止められない。
五日前には逞しい腕で自分を抱きしめ、熱いキスを交わした男が最早、床の上にも起き上がれないほど衰弱してしまった。
すべては自分のせいだ。私が王さまをあの時、引き止めていれば、雨に当たることもなく、王さまは今もお元気だったに違いない。
「一泣かないでくれ。私はそなたの涙を見るのがいちばん辛いのだ」
王は言いかけてツと小さく呻いた。
「胸がお苦しいのですか？」
王は小さく頷き、力ない笑みで応える。
「そなたのせいではない、真戸那。そなたが止めるのもきかず、私が無理にそなたを連れ出したのだ。何もそなたが責任を感じる必要はないのだよ」
「一」
藍那はうつむき、堪えられない涙を零した。
「そなたは考えていることがすぐに顔に出る。私がこのような有様になったことについて、そなたが思いつめているのは私にはよく判っている。されど、元々、私の心臓には致命的な欠陥があった。私が到底十八歳までは生きられまいと預言があったのは、この持病を持っていたからなのだ。今年、私はその侍医が預言したた歳より一年余分に生きたことになった。これでも、よく保った方だと思う。ゆえに、そなたは何も良心の呵責を感じることはない」
王は優しい笑みを浮かべた。
「私はもう起き上がることさえ叶わない。そなたが泣いても、私がそなたの涙を拭ってやれない。だから、もう泣かないでくれ」
王の吐く息が荒い。藍那は喋ろうとする王を制した。
「どうぞ、今はもうゆっくりとお寝みになって下さい。眼を覚まされたばかりなのですから、急にご無理をなさってはお身体に触ります」
しかし、王は首を振った。
「私は恐らく、もう長くはなかろう。こうして旅立つ前に意識を取り戻せたのは、せめてもの神のご加護であろうよ。ゆえに、今は黙って私の話を聞いてくれぬか」

　そうまで言われては、もう何も言えない。藍那は口をつぐみ、王の次の言葉を待った。
　この男(ひと)は既に哀しい覚悟をしている。元々、淋しげな瞳に今、はっきりと浮かぶのは諦観の色であった。「真戸那よ、私はもうすぐ私自身を育んでくれた海に帰る。もし、そなたが私に逢いたくなったら、泣いてなどおらず、海に来てくれ。されば、我らはいつでも逢える」
「いやです」
　従順で王に逆らったことのない藍那がいつになく嫌だとはっきり言ったのが王には珍しかったのだろう。軽く眼を瞠り、それから笑った。
「私はいやです。首里天加那志から、そのような哀しいお話はお聞きしたくありません。首里天加那志、あれをご覧下さいませ」
　藍那は開け放した障子戸の向こうを指し示した。
　この時代に来てひと月と少しが経った。初めてこの時代に飛ばされてきたその日、女官長と自室から見た光景が今更ながらに思い出される。
　黄金色の光に包まれていたガジュマルの樹は神々しいほどだった。今も、二人の前には夕陽を浴びて立つガジュマルの樹が見える。
「古いガジュマルには神が宿ると昔から言い伝えがあります。あのガジュマルにはきっと神の気が宿っていることでしょう。ですから、神聖な神の樹が必ずや首里天加那志をご守護下さいます。ゆえに、どうか、お心をしっかりとお持ちになり病に打ち勝って下さい」
　何故だろう、たった一ヶ月しか一緒にいなかったのに、もうこの時代に来てから何十年も経ったような気がしてならない。私はずっと昔から、この男を知っていたような錯覚に陥るのはどうして？
「ああ、そうだな」
　普段の王は国王として古くから伝わる琉球の神々を信奉はしているものの、極めて現実的な若者であった。あまり迷信とか占いとかに拘らない。
　なので、このときも否定されるかと思ったのだが、王は予想に反して、あっさりと頷いた。
　王さまはきっと私の心を思いやり、少しでも軽くしようとして敢えて否定なさらなかっのだ。そう思うと、尚更哀しみが込み上げてきた。優しい王らしい配慮である。
「首里天加那志はお優しすぎます」
　王は何も言わず、ただ静かに笑っているだけだった。
　泣くなと言われたばかりなのに、藍那は堪らず嗚咽を洩らした。噛みしめた唇からはすすり泣きの声が洩れた。

　その後、藍那は王の側を一時離れた。今、彼女は庭の最奥ー王と共に雨宿りをした場所を目指していた。古いガジュマルには神の気が宿ると教えてくれたのは亡くなった祖母だ。
　しかも古ければ古いほどその樹の持つ神気は強大なものになるという。ならば、王や自分の部屋の前庭にあるものよりも奥庭にあるガジュマルの方がもっとご利益はありそうに思える。
　王国ができた頃よりずっと歴代王や王朝の栄枯盛衰を見守ってきたこの樹ならば、今、重い病と闘っている王を救ってくれるのではないかと一縷の望みを抱いてやって来たのである。
　既に南国の陽は地平の向こうに沈み、庭は薄い闇に包まれようとしていた。女人の眉のように細い月がガジュマルの樹の向こうに危うげに掛かっている。
　藍那はその場に跪いた。
ーどうかガジュマルの樹よ、王国創建当時から、歴代王を静かに見守りし神宿る樹よ。王国の正当な末裔たる尚正王さまをお守り下さいませ。
　その刹那、藍那は息を呑んだ。紅い星がまるで燃えるように輝きながら細い月の側を通り過ぎ、堕ちていった。　思わず立ち上がり、空を凝視する。この時代から二百年後の現代では流星に願いをかけると叶うといわれ、むしろ幸福の予兆とされるけれど、この時代はどうだったのだろう。
　それに、今見たばかりの流れ星は何か禍々しいものを感じずにはいられなかった。そんなことは考えたくないのに、毒々しいほど紅い帚星は何か悪しきことの起こる予兆のようにも思えてー。
　そこで藍那はハッとした。
　そう、こんなときに首里天加那志の側を離れてはいけない。強い想いが込み上げてきて、彼女は慌てて王の寝所へと引き返した。
　寝所の前まで歩いてきた時、随分と騒がしいのにまず不吉な予感が警鐘を鳴らした。　庭には重臣たちが集まり、空を降り仰いでは口々に叫んでいる。
「星が堕ちたぞ」
「不吉だ。何か王国に悪しきことが起こる前触れかもしれぬ」
　病床に伏す国王の寝所の前である。流石に迂闊には話せないこととて、皆、声を潜めての会話ではあれども、近くにいる藍那には、はっきりと聞き取れた。
　やはり、この時代、流れ星は不吉なものとされていたんだわ。
　ぼんやりと考えていた藍那の耳に侍医の鬼気迫る声が飛び込んできた。
「首里天加那志、どうかお気を確かに」
　その声はただ事とは思えない。藍那は小走りに走った。突然の王妃の登場に、重臣たちは皆、頭を下げる。

　その中で小柄ではあるが、存在感のある男が藍那を見つめていた。紫色の冠（はままち）を被っているところを見ると、政治を司る高官の一人らしい。
「王妃さま、このようなときにどこにいらっしゃったのですか？」
　血相変えている男の顔にはまるで見憶えがない。しかし、横から〝朝親方〟と誰かが寄ってきたところを見、この男こそが王妃真戸那の父なのだと知れた。 藍那は一応朝親方に頭を下げ、そのまま王の寝所に駆け戻った。
　枕頭には侍医が侍っているが、その顔は酷く蒼白い。その様子から、藍那は既に王の生命が尽きようとしているのを悟った。
「王妃と話がしたい。二人きりにしてくれ」
　病人の最後の頼みと判り、侍医は頷いた。藍那に丁重に頭を下げ、寝所から出ていった。
　王の唇が戦慄いた。最初はよく判らなかったが、直に、それが何かを伝えようとしているのだと判り、藍那は側にいざり寄った。
　この方はもう声もお出しになれないほど弱っておいでなのだ。改めて涙が込み上げそうになるのを堪え、今はそのようなときではないと我が身を叱咤する。
「首里天加那志」
　顔を見つめると、王は少し笑ったように見た。更に口許に耳を寄せると一。
「予はそなたと出逢えて幸せであった」
　その瞬間、藍那は涙ながらに幾度も頷いた。
「私も一私も甲斐なき身ではありますが、首里天加那志とお逢いできて、幸せでした」
　王はまだ藍那を本物の王妃真戸那だと信じている。でも、これから逝こうとしている男にどうして真実が告げられるだろう。
　本当に幸せでした。
　たったひと月だったけれど、生まれて初めての恋をして、十八年間の人生でファーストキスも経験した。自分すら忘れていたバースデーにプレゼントまで貰った。
　きっとこれから先、どんな嬉しいこと愉しいことがあっても、あなたと過ごしたかけがえのないこの一瞬には比べようもないでしょう。
　できることなら、私はこの時代に生まれかった。王妃真戸那さまのように幼いときから、あなたのお側にいて、ずっと同じ時を分かち合い、想い出を作っていきたかった。
　でも、出逢えただけで幸せ。本当なら、この時代から二百年も後の時代に生まれた私は、琉球の国王であるあなたとは出逢えるはずもない運命だもの。それが時の悪戯で、ほんのちょっとでも、あなたの側にいられた。これ以上の最高の幸せがあるって？
　王の呼吸がいっそう荒くなった。急いで侍医を呼ぼうとした藍那の手を王が掴んだ。藍那はハッとして王を見つめる。
　王はぜいぜいと息を喘がせながらも、今度ははっきりと声に出して言った。恐らく最後の力を振り絞ったに違いなかった。

「もし一つ心残りがあるとすれば、良人としてそなたに何もしてやれず、守ってやれなかったことだ。不甲斐ない私はこの国の王たる資格もない。王妃よ、どうか私が死んだら、私の存在をこの国の記録から一切消してくれ」
　その科白が王としての遺言であることは判った。しかし、何という壮絶な遺言だろう。藍那は息を呑んで絶句した。　が、次の瞬間、藍那の手を掴んでいた王の手から俄に力が抜けた。ポトリと落ちた王の手を藍那は信じられないものでも見るかのように見つめた。
「首里天加那志、どうか眼を開けてください。私を見て。ねえ、あなた、私をもう一度見て下さい。お願いだから一」
　いつかあなたが元気になったら、私を今度こそ本当のお嫁さんにしてくれるんじゃなかったの？
　あの雨の日、二人きりのガジュマルの樹の中で約束したときのあなたは確かに笑って私を抱きしめてくれたのに、もう、あなたはこの世にはいないのね。
　あなたの身体はこんなにも温かいのに、もう、この身体からあなたの心は彷徨い出てしまったのね。
　藍那はそっと王の顔に顔を近づけた。まだ温かいけれど、既に息絶えた彼の唇にそっと自らの唇を重ねる。それは王妃真戸那ではなく、藍那としての恋人への最後のキスだった。
　熱い滴がとめどなく溢れ、頬をつたうに任せる。藍那の泣き声が聞こえたのだろう、侍医が色を失って寝所に飛び込んできたが、既に呼吸の止まった王を見ると言葉を失い、その場に平伏した。

　波が寄せては繰り返す。藍那は打ち掛けの裾をそっと持ち上げた。素足を波が洗う感触が何ともくすぐったいようだ。　彼女は亡き最愛の恋人に心で呼びかける。
一首里天加那志、あなたは私に言いましたよね。
　（真戸那よ、私はもうすぐ私自身を育んでくれた海に帰る。もし、そなたが私に逢いたくなったら、泣いてなどおらず、海に来てくれ。されば、我らはいつでも逢える）
　あの日のあなたの声が今でもありありとリフレインする。
　だから、私は泣きません。あなたとの約束どおり、こうしてここに来ました。
　ここに来る前に、藍那は尚正王の墓所に寄った。本当はそこで一愛する男の永遠に眠る側で自分も眠りにつきたかった。けれど、やはり何かが違うと思ったのは、その時、自分は死ねば海に帰るから、海に逢いに来てくれと言った尚正王の言葉が聞こえたからかもしれない。
　そう、ここ(墓所)には彼はいない。彼はあの言葉どおり、海へと還っていったのだ。だから、海に行かなければならない、彼に逢うために。
　藍那はその一心で海辺まで来た。
身の側を海風が吹き抜けてゆく。南国とはいえ、季節はもう秋。吹く風も彼が亡くなった夏とは違う。
　彼が亡くなって三ヶ月、よくぞこの時代で今日まで生き存えてきたものだ。せめて最後を迎え

るのは彼の側でと決めていたから、墓所が完成するまで待ち続けたのだ。その一念が彼女をこの時代に、いや、この世に辛うじて引き止めていた。
　でも、もうそれも今日で終わる。彼のいないこの世に未練なんてない。
　ああ、私の側を風が駆け抜けてゆく。彼の愛した、私も愛したこの美しい国の風、琉球の海を渡る風。　風が藍那の髪をそっと揺らす。藍那は一歩、一歩、確かな足取りで前へと進んでいく。やがて白い波が彼女の華奢な身体を飲み込み、その姿は蒼い海の底へと消えた―。

Ｔｈｅ　ｋｉｎｇ　ｗｈｏ　ｄｉｓａｐｐｅａｒｅｄ～消えた国王～

海中へと飲み込まれた途端、水が藍那向かって押し寄せてくる。海水が鼻や口を塞ぎ、呼吸ができなくなった。まるで自分の周囲の空間がねじれ、歪んでしまったようで、物凄い圧力に身体が押し潰されそうだ。

固く瞑った瞼の裏で白い光が閃く。この感覚はどこかで経験したような気がするのだけれど、どうしても思い出せない。

でも、これはすべて自分の選んだ道なのだ。藍那は少しの間、苦悶にもがいたが、やがて、気を失った。

目覚めた時、藍那は机に突っ伏して眠っていた。図書館の二階の窓際には、古めかしい机が一つずつ、前から数個並んでいる。そこは自習や調べ物用の利用者のためのものであり、禁帯出の文献などを調べるときにも使われる。

自分はいつのまに、この机まで歩いてきたのだろうか。高架から本を取り、最初のページを捲って系図を眺めたところまでは憶えているが、それから先の記憶がない。

慌ててショルダーバッグから携帯を取り出す。ピンクの二つ折り携帯を開くと、四つ葉のクローバーの待ち受け画面には五時と表示されていた。沖縄の蔵書コーナーに来たのは確か一時少し前だったから、きっかり四時間過ごしたことになる。

あの時代にいたのは四ヶ月のはずなのに、実はたったの四時間しか経過していなかったなんて信じられない話だ。では、自分は四時間もの間、ここで眠りこけていて夢でも見ていたのだろうか。

と、藍那は自分の手が何かをしっかりと握っていることに気づいた。それは信じられないほど豪華で優美な珊瑚の簪であった。大きな紅珊瑚を花の形に仕上げた逸品だ。

ーこれは！

この簪が誰から誰へと贈られたものか、藍那は知っている。これは尚正王から王妃真戸那へと十八歳の誕生日に贈られたものだ。　そう、確かにあの時代、琉球の海に入るときも懐にはこの簪を忍ばせていた。藍那にとって大好きだった男と過ごしたわずかな時間を偲ぶたった一つのよすがであり、彼の形見でもあったからだ。

あの時代で過ごした日々が本当に夢であるならば、このようなものが今、自分の手許にあるはずがない。　更に、藍那はデスク上に開いたままになっている本を見た。その側に何か落ちている。　そっと指の先で摘んで持ち上げてみれば、それは小さな小さな二つの星の砂であった。間近にかざして見つめると、貝はデスク横の窓から差し込む陽光でキラキラと控えめな輝きを放つ。

ーこれは星の砂。
　あの時代で王と共に波打ち際で戯れた日、二人で拾った星砂たちに違いなかった。
　熱いものが頬をすべり落ちているのに気づき、藍那は初めて自分が泣いているのだと知った。
　彼から贈られた簪や二人で拾い集めた星の砂が、あの幸せなひとときは夢ではないと教えてくれる。
　藍那は改めて分厚い本をめくってみた。
　まずは冒頭の開いたままのページを見る。そこには四時間前に見たのと同じ、琉球王室の系図が載っている。　更にページをめくっていくと、歴代の王についての略歴が記されているページになった。当然ながら初代国王から順に並んでいる。ページを繰るのももどかしく進んでいくと、かなり後半になって〝尚正王〟の項があった。
　一瞬、読みたくないと思ってしまうが、ここまで来て引き返せないこと、また、引き返してはいけないことも判っていた。
　藍那は一旦、眼を伏せてから、覚悟を決めてそのページに眼を通した。尚正王のページは他の王たちに比べると極めて短く、わずか数行で終わっていた。　ひととおり読み終えた藍那は涙を流しながら、その部分を繰り返して読んだ。

　尚正王　琉球王朝後期の国王とされている。しかしながら、在位わずか半年で病を得て亡くなったと伝わっている。父尚〇王の死により若くして王位に就くも、清国からの冊封使が来る直前に崩御。尚正王自身の遺言により、その即位はむろん存在すらも永遠に歴史より抹消して欲しいとの望みで、その存在が歴史書に記されていないのだという説が有力。
　なお、同時代に生きた官吏の私的な日記には、確かに尚正王の記述があり、この年若くして逝った王は実在の王であることはほぼ確実であることを示している。

　王の隣には王妃や側室たちの記述もわずかながら併記されている。尚正王の隣には王妃　朝真戸那と記され、その生涯については、

　王妃は王の死を哀しみ、王の墓の側で自決したと今に伝えられている。御年、十八、尚正王の死後、三ヶ月の事といわれている。

　仮にも一国の王妃が入水自殺したと世間に広まるのは王府としても避けたかったのだろう。
ーでは、私が真戸那だったの？
　藍那は今、やっと理解できた。何故、今日という日に自分がここに来て、この本を手に取ったかも。

恐らく、自分は真戸那の転生した姿なのだ。この現代には馬鹿げた話だと笑う人の方が多いだろうし、藍那自身、誰にも言うつもりはなかった。話したところで、頭がイカレていると思われるだけだ。
生まれ変わりと考えれば、自分があの時代へ飛んだことも、真戸那とどうやら姿形がうり二つであったことにも納得がいく。しかも誕生日まで同じだった。
真戸那であった前世の自分は伝えたかったのだろう。十八年という短い生涯を自分がどのように生き、人を愛したかを。短くても、けして不幸せではなく、生涯にただ一人の男とめぐり逢い、愛し愛された幸せな日々を過ごし、そして最後まで愛に殉じて逝ったのだと。
ーあなたは幸せだったのね、真戸那。
藍那は流れ落ちる涙を拭おうともせずに、更に本のページを捲った。
ラストのページには、こう記されていた。

こうして悠久の時を刻むかに見えた琉球王朝は終焉へと向かっていった。
尚正王の名はわずか十九歳で亡くなった悲劇の王として歴史書に刻まれることなく、遺言どおりに抹消され、歴史から消え、その存在も葬り去られた。
尚正王が崩御したとされる七十年後、日本は明治維新を迎える。日本の夜明けとともに、華やかに栄えた琉球王国も落日の瞬間(とき)を迎えようとしていた。

机の片隅に置いた携帯からメールの着信音が鳴った。どうやら、その音が藍那を現実に引き戻してくれたようだ。 ー早く返ってきなさい。今日は仕事が早く終わったし、藍那の好きなシチューを作って待ってるから。それに、明日は少し早めに藍那の十八歳のバースデープレゼント買いにいく約束だったでしょう。
メールは母からだった。
藍那は微笑み、二つ折り携帯を閉じると、立ち上がった。思い出してハンカチで珊瑚の簪を丁寧に包み、バッグの底にしまう。小さな星の砂はティッシュで包み、壊れないようにティッシュケースに入れた。
そうしておいてから、バッグを肩にかけ、また梯子を使って分厚い本を書棚に戻すと、大好きな嵐の歌をハミングしながら図書館の古めかしい階段を駆け下りた。

その夜、藍那は歴史の課題レポートを書き始めた。タイトルは〝幻の琉球国王とその王妃の生涯について〟。

（了）

ブーゲンビリア　　花言葉ー情熱、魅力、あなたにしか見えない

※　この作品はすべてフィクションであり、登場するすべての人物は架空のものであり、事実とは関係ありません。

あとがき

六月から見始めた時代劇〝テンペスト〟は予想外に面白くて、引き込まれました。全五巻まで見てきて、もう一度通してみたいと思ったのがアマゾンでＤＶＤボックスを買おうと思った理由です。

私としては思い切った買い物でしたが、一昨日の夜、わくわくしながら一巻を見始めたら、唐突に琉球を舞台にした作品を書いてみたい！　という想いに取りつかれました。

実は以前から、テンペストを見て、こんな風な小説を自分でも書いてみたいと思っていたのです。しかし、琉球の歴史もろくに知らない私にはかなり高いハードルでした。

とはいえ、韓流小説も元々は歴史なんて少しも知らずに飛び込んだ世界でした。描きたいという気持ちがあるのなら、学びながら書いていけば良いのです。

そんな想いで書き始めたこの作品、いかがでしたでしょうか？　韓流小説から日本の時代物に帰ってきたばかりなので、今はまだ、始めたばかりの時代小説の方を完結まで頑張りたいと思いますが、いずれチャンスがあれば、琉球についてももう少し書いてみたいです。

さて、今更ですが、琉球について少し調べてみました。尚正王はもちろん架空の王様ですが、何とも面白い偶然を発見。巻末の歴代王の名前を見て下さい。　実は私が設定した小説の舞台は千八百年初頭でした。丁度その頃、琉球には本物の尚成王という王様が実在していたのです。しかも、その王様は二歳で即位して、在位わずか一年にも満たずに亡くなっています。　もちろん、尚成王はちゃんと記録に残っていますが。その点を除けば、何という一致でしょう。架空の王様を主人公に据えて、歴史ファンタジー風に描こうと思ったので、書く前に敢えて歴史は調べなかったのですが、たまたま私が設定した年代に夭折し、在位わずかで亡くなった王様が存在していた一何か縁のようなものを感じました。　しかも、名前まで尚正と尚成、音読みにすれば同じです。偶然といえば偶然かもしれませんが、不思議なこともあるものですね。　というわけで、今回はまったく想定外の作品とあいなりました。　初挑戦も同然の作品なので、何かとお気づきの点も多々あるかと思いますが、激動の歴史の中で懸命に生き、短い生命、恋を輝かせた二人の恋人たちの姿をご覧頂けたらと思います。　今月は少し間を置いて、もう一作書くつもりです。どうぞ、皆さま、暑さに負けないように厳しい残暑を乗り切って下さいね。

東　めぐみ拝 2013/08/09